

二つのテーマの響き合う世界

『新編国語総合』という音楽

小池秀男

(『新編国語総合』編集委員)



●長すぎる前書き

例えば、あなたの好きな楽曲の冒頭を思い浮かべていただきたい。

コンサートの始まり。期待に満ちた静寂の中から、最初の音が立ち上がり、ついで、静かに、あるいは華やかに、音楽が会場に満ちていくあの瞬間。最初のテーマが、少しずつ形を変えながら、パートからパートへと受け継がれ、音によって時間が紡がれ、音によって空間が満たされていく……。

音楽のことは人を人のことに置き換えることは、困難なだけでなく、あるいは無意味な試みかもしれない。しかし、音

楽に疎く、音痴を自認する自分にも、そうした瞬間に、音楽が語りかけるものが、音楽によってもたらされるものが、確かに存在するという実感はある。

高校の国語の教師になって三十余年、教科書の編集に携わるようになってからも十年ほどになる。

ともかくおもしろい教科書を、生徒と先生がそれをネタに興奮して語り合えるような教科書をつくりたいと、やみくもにやってみて、最近になってようやくわかってきたことが一つある。生来の鈍さを告白するようで、今さら言うのも恥ずかしいが、それは、国語の教科書というものは、数ある教科書の中でもきわ

めて特異な存在であるらしい、ということだ。

例えば、物理の教科書、日本史の教科書を想像していただきたい。それは執筆されるものである。それに対して、国語の教科書は、編まれるものである。編集委員が執筆する部分もないではないが、大半は、ひとさまの文章である。ひとさまの文章を、失礼千万にも、選定し、配列し、授業をイメージして方向付けるのである。これを僭越と言わずして、何を僭越と言おうか。

その僭越な行為が、とりあえず許されているのはなぜか？

無茶を承知で断言すれば、それはファンだからである。編集委員が、その文章の（教科書に置かれた形における）最初の読者であり、最初のファンだからである。もちろんそれは、ファンの甘えである。しかし、ファンとはそういうものだということも、暗黙の了解事項であろう。

とはいえ、ファンにも何もかもが許されているというわけではない。個人として楽しむのなら、どのように読もうが、どのように切り刻もうが自由である。しかし、一応教科書として出版される以上（一応！）、公的な説明責任は果たされね

ばならない。そのエクスキューズにおいて、私たちの乱暴狼藉は、辛うじてお目こぼしにあずかっているのである。

その説明責任のための文章を編集方針という。しかし、ここではそういうしかつめばった話題は避けたい。もっと自由に、穏やかに、そう、流れてくる音楽に身を委ねるように、この教科書の語りかけてくるものに耳を澄ましていただきたい。

●二つのテーマ

『新編国語総合』を音楽になぞらえて語るならば、この音楽は、二つのテーマとその変奏によって構成されている。

表紙裏の見返しから、口絵写真、冒頭教材である「水の惑星」に至る流れは、その緩やかな序奏である。そこで静かに提示されるのは、近代文明の行き着いた二十世紀に、われわれ人類が到達した自己認識のひとつのスタンダードである。それは、決して目を驚かすようなものではないが、それゆえに、未来を志向する静かな意志の表現となっている。

この教科書に流れるテーマのひとつは、このようにして提示される。すなわち、「スタンダード」である。それも、単な

るランク付けとしての「標準」ではなく、正統性を踏まえたという意味での「スタンダード」。

個々の教材の内容にも、教材の配列にも、学習の手引きの付け方にも、私たちがまず目指したのは、高校の教室のスタンダードであった。今回の改訂で、現代文では、随想を減らし、代わりに評論を増やしたのも、古文の内容を見直して日記や紀行を導入し、すべてのジャンルを網羅することを目指したのも、そうしたねらいの結果である。

このテーマに絡むようにして、少し遅れて二つめのテーマが始まる。もともと、それが明白に意識されるためには、もう少し教材を読み進んで、「ユー・ジーンへの旅」に至る必要があるかもしれない。

「読んで話し合おう」という方向付け自体がすでにテーマの一部であり、ユー・ジーンにおけるコミュニケーション・インテグレーションの現状報告という内容が、テーマの中核である。

ここで提示されるテーマは、「ユニーク」。本質的な意味での「ユニーク」。

この教材自体は、決して新しいものではない。最初に教科書に採録されたのは、十年ほど前の『新編国語I』であったと

記憶する。それ以来、一貫してこの教材は『新編国語』シリーズに採録され、シリーズのアイデンティティを形作ってきた。その内容は、十年を経て今なお古びていない。それどころか、時の経過とともに、ますますその問題意識は重要な意味をもつてきている。時代がようやく追いついてきたのである。

同様のことは、後半にある「ナガサキの郵便配達」にも言える。この教材もまた、三省堂が独自に教科書に採録して十年以上になる。現在の「国語総合」になって新たに採用した「読んで話し合おう」という位置づけとともに、この教科書のユニークな個性を形成している。

古文について言えば、「異界と出会う」と名付けられた単元に「ユニーク」のテーマは強く響いている。宇治拾遺物語から採られた二つの話は、教科書ではあまりなじみのないものではあるが、単に奇をてらい、生徒の興味に迎合したものではない。物語の起源が、まず不思議を伝えるものであったことを思えば、むしろ文学の伝統を踏まえたオーソドックスな教材選択であるとも言えよう。

漢文もまたしかり。「捜神記」による「復活」の物語が、まさに同じテーマを奏で

ている。

教材の配列についても、ユニークな仕掛けが見られる。カリキュラムに応じて、一年間使用にも二年間使用にも対応できるように、教材の配列は二つのユニットで構成されている。「現代文」でそれは最も顕著だが、「古文」にも「漢文」にも、緩やかな形でそれは意識されている。

● テーマの変奏

「スタンダード」と「ユニーク」。このふたつのテーマは、以上述べてきた以外にも、さまざまに変奏されて、この教科書のあちこちに響いている。

まず、現代文を見てみよう。たとえば、小説である。小説教材の、スタンダード中のスタンダード「羅生門」に配するのは、「草之丞の話」というファンタジーであり、手練れのストリーター太宰治のユニークな小説「猿が島」に配するのは、現代小説のスタンダード「みじりのゆび」である。

あるいは、評論である。評論教材のスタンダード「水の東西」とともに新しい評論「世界観の変貌」が置かれ、認識論、言語論のスタンダード「コインは円形か」

「言語は色眼鏡である」には、「情報と身体」というイキのいい現代評論が配されている。

古典を見てみよう。

冒頭に置かれる「古典の響き」は、組み合わされる写真とともに、それ自体がこの教科書のユニークな個性であるとともに、古典を読む楽しみの根底に、「調べ」や「響き」を味わうことがあるという当たり前の事実を思い出させるという意味で、スタンダードをも指向している。

同様の指向性は、「うたう心」の單元にも見られる。和歌のスタンダード「百人一首」とともに置かれているのは、高校の教科書にはあまり採られることのない歌謡集「梁塵秘抄」であり「閑吟集」である。古典文学の本流が韻文にあったことを思えば、このユニークな教材配列の中にも、古典文学のスタンダードへの指向性を認めることができよう。

漢文はどうだろうか。

たとえば、「漢文入門」に置かれた「五十歩百歩」の扱いである。多くの教科書が、故事成語として、前後の文脈から切り離れた形でこの小話を採録しているのに対し、この教科書では、リード文を使って前後の文脈を示し、そこにこの話を位置

づける形で読ませようとしている。全訳がつけられているのは、漢文初学者への単なる配慮ではなく、そうした学習を成立させるための積極的な方策である。当然のことながら、「手引き」もまた、それを踏まえた形で展開している。

● ファイナーレの後で

「スタンダード」と「ユニーク」。それは一見矛盾するテーマのように思われるかもしれない。しかし、この教科書を手に取り、この文章をここまで読んでくださったあなたには、このふたつのテーマは決して矛盾するものではなく、むしろ密接につながった一つのテーマのように感じられているのではなからうか？ 響き合う二つのテーマが相まって、全体として一つのハーモニーを奏でている、というほどのものではないにしても。

小池秀男（こいけひでお） 高校での三十年余りの教員生活ののち、昨春、養護学校に移る。ことばとことばのない世界との狭間で、人間とは何かを繰り返し自問する日々。